

ワシントンからニューヨークに向かう列車の車内を、大晦日の興奮と真夜中の疲労が満たしていた。かなり酔っているらしい数人の若い男たちが、通路の向かい側でどんちゃん騒ぎし、迷惑そうな周りの乗客に陽気な大声で話しかける。

地球上のどこでもないと思えてくるほど何もない暗闇の真ん中、確かフィラデルフィアとトレントンの間あたりで、列車はまた停車した。凍てつく雪嵐の中、列車はその晩すでに何度も停車を余儀なくされている。このままだと新年は列車の中で迎えることになりそうだ。数人の乗客がイライラした様子で歩き回り始めた時、私の真後ろの席の赤ちゃんが泣き出した。その泣き声は金属音のように私たちの耳の奥まで入り込み、時折遠ざかっていくこだまのように弱まるかと思えば、また金属音となって耳の奥に帰ってくる。

どんちゃん騒ぎはますます大きくなる。他の乗客は、列車の停止やどんちゃん騒ぎさえも、まるで泣き続けるこの赤ちゃん和日本語で必死にあやす若い母親に全責任があるかのように、鋭い苛立ちの目を向ける。赤ちゃんの父親までも、母親に文句を言っている。

列車が再び動き出す。ようやく駅に近づくと、赤ちゃんの父親が自分のバッグだけを持って降り口に向かった。物音がして振り向くと、紅い顔をした母親が赤ちゃんを腕に抱き、大きなベビーバッグと彼女自身のバッグを肩に掛け、折りたたみのベビーカーを引いて夫に続こうとしている。見かねて私が日本語で話しかけようとした時、どんちゃん騒ぎをしていた男たちのうちの一人が、驚くべき機敏さで彼女に近づき、ベビーカーを彼女の手から優しく引き取った。そして車両のドアをさっと開け、まるでお姫様でも通すかのようにドラマチックにドアの方へ「どうぞ」とばかりに手を差し伸べると、顔だけを赤ちゃんに向け、突然ニッと白い歯を見せておかしな顔をした。母親は一瞬怯えたような表情をして、うつむき加減に言った。「サンキュー。」それから思い直したように今度はまっすぐ男を見て、日本語のアクセントがはっきりと聞き取れるくらいの声で、「サンキュー、ベリー、マッチ。」ともう一度言った。どんちゃん男は無邪気に微笑むと、彼女のアクセントを真似て、ゆっくりと楽しそうに言った。「ユー、アー、ウェルカム！」

Message

それは「どういたしまして」の意味だったのだろう。でも私にはその「ユー、アー、ウェルカム！」が、「君たちはこの世界に歓迎（ウェルカム）されているんだよ。」という温かいメッセージに聞こえた気がした。

